

## マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 7

朴 希沙(Kisa Paku)

前回は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要なことを、Sue(2010)の提案を紹介し考察しました。今回は、私が携わっていた在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても」の実践から、マイクロ・アグレッションを乗り越える対話について考えてみたいと思います。

### ◎はじめに ～前回のふりかえり～

去年から今年にかけて、マイクロ・アグレッションに関するワークショップをいくつかの場所で開催してきました。その過程で、マイクロ・アグレッションを紹介した際に受けるある種の反応があることが分かってきました。それはまず、自分の被害体

験を話してくださる、というものです。「あの得も言われず嫌だった体験は、もしかしたらマイクロ・アグレッションだったのかもしれない」と、自分の体験を話してくださる方がしばしばおられます。このように被害を受けた体験がある場合、マイクロ・アグレッションの概念をよく理解し、自分の体験について新しく捉え直して語ってくださることが多い印象を持っています。逆に、マイクロ・アグレッションの話聞いて自分個人が責められている or 責められるかもしれないことに、嫌悪感や抵抗感を抱く方もいます。実際ワークショップを開催すると、このように抵抗感を持つ方と、多く出会います。そこで、回を重ねる中でどうやったら抵抗感少なく、責められている

という気持ちにとらわれずに話を聞いてもらえるだろうかということを模索してきました。現在ではワークショップをする際に、マイクロ・アグレッションの内容に入る前にまず「聞き方の心構え」についてお話しするようにしています。このワークショップをしていて、マイクロ・アグレッションの話がある種の反応（抵抗感）を引き起こすことが分かってきたことを率直にお伝えし、ワークショップをしているこちら側のスタンスを伝えます。そのスタンスとは、①マイクロ・アグレッションとは社会における力の非対称性から生じるものであって、②この社会で生きていく以上、誰でも起こしてしまうことであり完全になくしたり防いだりすることはできないこと、③そして個人だけに問題があるわけではないということです。ここで大切なのは、マイクロ・アグレッションを考える際に「差別してしまうかもしれない」自分個人について考えるのではなく、この社会の構造と歴史から生まれてくる不公正なシステムに思いを馳せるということです。マイクロ・アグレッションは日常的で微細な現象であるために、個人間の葛藤や対立、もやもやとして現れ出ることが多いようです。ですが、マイクロ・アグレッションを「個人の問題」として捉えても、それを乗り越えることは出来ません。むしろ、なぜこのようなことが起こるのか、どうしてマジョリティとマイノリティの間でリアリティや認識に差異が生まれるのか、その社会的・歴史的背景を探っていくことが、大切です。

私が最近思うのは、マイクロ・アグレッションというのは、もちろんその被害を受けた人にとって、自分の体験に名前が付き、

研究し、解決方法を模索することが出来るようになるという点で意義深い概念ですが、それだけでなく、普段は社会や歴史について考えることの少ないマジョリティの人々にとっても、非常に意味のある概念になり得るということです。普段、例えば自分のセクシュアリティや身体、人種や民族について違和感を感じたり嫌な思いをしたりすることが少ない人にとって、社会や歴史というのは、どこか遠い話のように感じられるかもしれません。自分のことを、ただの「個人」だと感じ、社会的属性について思い巡らすことも、ほとんどないかもしれません。しかし、マイクロ・アグレッションは日常における些細な言動や葛藤が、実は社会的背景や歴史的脈絡から生じていることを示してくれます。もし、マイノリティの人々との間で生じる葛藤を、個人の問題としてではなく、マイクロ・アグレッションとして理解することができれば、それは私たち自身が歴史的・社会的存在であることを理解することにもつながっていくと思います。そのような意味で、マイクロ・アグレッションは、マジョリティにとっても、「個人的存在」という殻を破り社会的存在になっていく際の「創造的葛藤」として機能し得るのではないかと感じています。

さて、今回は前回マイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要となることについて、Sue(2010)の提案から考えてみました。そこでは、①人種／民族が異なる人々・女性・LGBTに関してその集団に属する人から学ぶべし、②マイノリティグループに属する健康で強い人々から学ぶべし、③経験的リアリティから学ぶべし、④バイアスと恐怖に対する継続的な警戒心から学ぶべし、

⑤レイシズム・セクシズム・ヘテロセクシズムに対抗する個人的行動に参加することから学ぶべし、という5つの原則から私たちが日常的に出来る実践について取り上げられていました。

今回は、私が携わっていたサポートグループ「してもの会」の実践から、マイクロ・アグレッションを乗り越える対話について考えてみたいと思います。

### ◎マイクロ・アグレッションを乗り越えるために ～「してもの会」の実践から～

#### ・サポートグループ「それが一人のためだとしても」とは

在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても（以下、『してもの会』）」の実践については、この連載の中でもしばしば取り上げてきました。「してもの会」は、在日コリアンと在日コリアンの友人や恋人などをもつ日本人により2011年に結成されました。当初は在日コリアンの個人的な悩みに関して「べてるの家」などで実践されている「当事者研究」を用いて自助的活動をすることが主な目的でした。しかし活動を展開する中で、在日コリアンの「個人的な」悩みの背景には、日本社会や朝鮮半島の情勢、家族の歴史等が存在し、また「被差別」というくくりだけでも語れない「一筋縄ではいかない」問題を孕んでいることが明らかになっていきました。それに従い、活動も自助グループやサポートグループという枠組みを超えて展開していくようになります。その主な内容としては、①運営会議、②当事者研究、

③学習会、④歌やラップ等の文化創造活動、⑤ピクニックやお泊まり会などの遊び、でした。そしてその過程で、在日コリアン個人が抱える悩みについて話し合ったり、それを表現したりします。それだけでなく、在日コリアンと日本人の間に存在する歴史的な分断や差異についても、学習会を始めとした様々な場面で取り上げて話し合い、「分断に向き合うことから動き出す交流」を大切にしていました。私も、「してもの会」には結成当初から参加してきました。この「してもの会」の実践は、2015年、2016年に冊子としてまとめられている他、日本質的心理学会学会誌『質的心理学研究』第18号『「してもの会」における Respectful Racial Dialogue の実践—在日コリアンと日本人の『分断から動き出す交流』にまとめられていますので、関心のある方はそちらも読んでいただくと、どのような活動が行われていたのかよく分かると思います。

#### ・「うぎゃー！」感—在日コリアンと出会った日本人に生じた感覚

「してもの会」で行われていたことや、そこでの在日コリアンの変化などについては、色々な角度から論じることが出来ます。ですが、今回は「マイクロ・アグレッションを乗り越える対話」をテーマにしていますので、今回及び次回を通して「してもの会」の日本人参加者の中の「在日コリアンと話している時に生じた感覚」について取り上げて紹介していきたいと思います。

「うぎゃー！感」というのは、「してもの会」の日本人の間で生まれた流行語で、在日コリアンとの対話の中で日本人に生じる独特な感情を指しています。この「うぎゃ

ー！感」は、自分が社会的な存在でもあることに気づき、受け入れる際に生じると言われています。例えば、在日コリアンとの対話の中で受けた「衝撃」に関して、次のように語る日本人参加者の方がいました。

A さん: (「在日」メンバーが) すごく大切な話をしてくれるじゃない? 自分の家族の話とか、あの一、おじいさんがこのとき来てとか、お父さんがこの時に日本に来てとか、そういう家族史みたいなこととか、すごく大切な話まで聞かせてもらったり。(中略) また日本社会とかどうしてるかとか、日本人をどう見てるかっていう話もしてくれるじゃない。それは本当にひとつひとつ、特にやっぱり日本人をどう見てるかとかいうことはものすごいショックだったし。でも、自分にとってはものすごい衝撃なんだけど、でもやっぱりそれが聞きたかったんやと思う。

在日コリアンの悩みを取扱い、その悩みの背景に存在する日本社会の状況や家族史などを話し合っていく過程で、「してもの会」の日本人参加者たちは、日本社会や日本人が在日コリアンにとって抑圧的であったり差別的であったりすることに気付いていったといいます。そしてそれに気付いた時に、「自分で選んだわけじゃないみたいな感覚」や、「自分も(抑圧者としての)日本人はいやなのにとかさ、否認して押し付けられたくないなって思ったりする」気持ちが出てきたりしたそうです。このような感情は、過去の植民地支配の歴史に向き合う際に大なり小なり多くの日本人に生じるものかもしれません。例えば、「自分だってこの社会で嫌な思いをしてきた」という気持ちが湧いてきた日本人メンバーによる以下のような語りがあります。

B さん: すごい、いじけた気持ちが出てきたの。(中略、在日の話を聴いている時)「いじけきた自分」みたいなのが出てきはったんやんか。それは要するに「日本人だとしてもそんないい目見てるわけじゃない」とかを言いたい感じなんだと思うんだよ。

C さん: みんな日本社会で生きてて、なんの問題も葛藤もない人って当然いないんだけど、それを「扱えない」みたいなのがあって。(中略) もう諦めながら生きていくしかないみたいな感じ。(それで) 外国とかに「戦争責任の」話で「日本」がつつつかれたときに変にそれを出しちゃったりするのかな。「自分だって我慢してるんだから、お前らもっと我慢しろよ！」みたいな

しかし、このような感覚は在日コリアンと日本人との間に存在する分断や葛藤について曖昧にせずに取り扱っていく中で、次第に変化していきます。

次回以降は、この「うぎゃー！感」がどのように変化していったのか、変化が可能になる場や条件とはどのようなものなのか、といったことについて、マイクロアグレッションとの関連の中で書いていきたいと思えます。

#### 【参考文献】

Sue, D.W.(2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.